

# 『賢愚経』と『金光明最勝王経』の蔵訳者について ——捨身飼虎本生話を中心として——

石 田 勝 世

1. 概要 蔵訳『賢愚経』の訳者は誰か、特に法成であるか否か検証するための予備調査を行った。その結果について報告する。蔵訳『賢愚経』は、ほとんどの版では失訳人名になっているが、デルゲ版の目録で法成訳とあり奥書には漢語からの翻訳と記されている（上山 1990）。訳者は本当に法成であるのか、このことを検証するために法成訳と伝わる他の経典と翻訳方法や翻訳文体などを比較して調べる<sup>1)</sup>。比較対象とした経典は、共通する内容（捨身飼虎本生話）を所収する、蔵訳『金光明最勝王経』である<sup>2)</sup>。本稿では予備調査として行った「蔵訳テキストの比較検討」「計量文献学の適用可能性の検討」について述べる。

2. 蔵訳テキストの比較検討 比較対象とする捨身飼虎本生話は、釈尊が過去世で飢えた母虎と子虎とを救うために自分の身体を投げ出して食べさせるという物語である。次の蔵訳と漢訳のテキストを利用した（壬生 1987）。漢訳テキストは蔵訳した時の原テキストとは異なる可能性もある。

蔵訳『賢愚経』（D no.341）2 章（中華大蔵経 vol.74, pp.420-427）

蔵訳『金光明最勝王経』（D no.556）26 章（中華大蔵経 vol.89, pp.355-374）

漢訳『賢愚経』摩訶薩埵以身施虎品第二（大正 no.202, vol.4, pp.352b-353b）

漢訳『金光明最勝王経』捨身品第二十六（大正 no.665, vol.16, pp.450c-454b）

以下に述べる蔵訳比較 1～3 は、2 つの経典ではほぼ同一な場面をとりあげて比較したものである。漢訳と蔵訳で対応する箇所を下線を付した。参考までに蔵訳の和訳もあげておく。

## (1) 蔵訳比較 1: 主人公摩訶薩埵の三兄弟の紹介

『賢愚経』仏告阿難：「乃往久遠阿僧祇劫，此閻浮提，有大国王，名曰摩訶羅檀囊，秦言大宝，典領小国，凡有五千。王有三子，其第一者，名摩訶富那寧，次名摩訶提婆，秦言大天，次名摩訶薩埵，此小子者，少小行慈，矜愍一切，猶如赤子。」 bcom ldan 'das kyis kun dga' bo la bka' stsal pa / sngon 'das pa'i dus bskal pa grangs med pa'i pha rol na / 'dzam bu'i gling 'di na rgyal po shing rta chen po zhes bya ba zhis yod de rgyal po des rgyal phran lnga stong snyed la dbang byed do / / rgyal po de la sras gsum mnga' ste / rab ni sgra chen po zhes bya'o / /

## (66) 『賢愚経』と『金光明最勝王経』の蔵訳者について (石 田)

'bring po ni lha chen po zhes bya'o / / tha chungs ni sems can chen po zhes bya ste / sras tha chungs de chung ngu nas byams pa dang snying rjer ldan te / thams cad la bu gcig pa dang 'dra'o / 世尊はアーナンダに話された。「過去阿僧祇劫の昔に、この閻浮提に大車という名前の王がいて約5千の小王を統治していた。この王には3人の王子がおり、長男は大音という名前で、次男は大天という名前であった。末の子は摩訶薩埵という名前であった。その末の息子は幼いころから慈と悲を具えていて、誰に対しても独り子のように（接した）。」

『金光明最勝王経』仏告阿難陀：…「阿難陀！ 過去世時有一国王，名曰大車，巨富多財，庫藏盈滿，軍兵武勇，衆所欽伏，常以正法施化黔黎，人民熾盛，無有怨敵。国大夫人誕生三子，顔容端正，人所樂觀，太子名曰摩訶波羅，次子名曰摩訶提婆，幼子名曰摩訶薩埵。」 bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa / kun dga' bo sngon byung ba 'das pa'i dus kyi tshe yul gcig gi rgyal po shing rta chen po zhes bya ba shin tu phyug cing nor mang ba / bang mdzod rgyas pa / dmag gi dpung rab tu dpa' ba / mang po kun gyis bkur zhing ngag nyan pa / rtag par yang dag pa'i chos kyis skye bo 'dul ba / mi mams dar zhing rgyas pa / phyir rgol ba'i dgra med pa zhi yod de / btsun mo dam pa byad bzhin shin tu sdug cing mdzes pa / mang po kun gyis blta bar mos pa'i bu gsum yod de / bu chen po'i ming ni sgra chen po zhes bya'o / / bu 'bring po'i ming ni lha chen po zhes bya'o / / bu tha chungs kyi ming ni sems can chen po zhes bya'o / 世尊は話された。「アーナンダよ。過去世の時に大車という一国の王は、とても富み財が多かった。蔵は満ちて、軍隊の力はとても強く、多くの人々により敬意ももって言葉が傾聴され、常に正法により人々を教化し、盛んで豊かになった人々を有し、敵対する敵はいない（王が）いた。最高の王妃には、容色がとても美しく素晴らしい、多くの人々が見ることを願う三人の息子がいて、太子の名前は音大といい、次男の名前は大天といい、末の子の名前は摩訶薩埵という。」

## (2) 蔵訳比較 2: 兄弟の会話 (母虎は子虎を食べるであろう)

『賢愚経』見有一虎適乳二子，飢餓逼切，欲還食之。其王小子，語二兄曰：「今此虎者，酸苦極理，羸瘦垂死，加復初乳，我觀其志<sup>3)</sup>，欲自噉子。」二兄答言：「如汝所云。」 stag mo zhi bu byung nas zhag du ma lon pa bkres shing skom pas nyen te / phyir yang bu zos la thug pa zhi mthong nas / rgyal bu tha chungs kyis phu bo gnyis la smras pa / stag mo 'di ni shin tu sdug bsngal gyis gzir te / nyam chung la rid pas shi la thug pa 'di lta bu / bu byung ma thag pa yang zos su 'dod do zhes smras pa dang / phu bo gnyis kyis khyod zer ba bden no zhes zer ro / 子が生まれてから多くの日が過ぎた一匹の牝虎は飢えと渇きにより苦しめられ、そのうえ子を食べる寸前にある（牝虎を）見てから、末の王子が二人の兄に言うには「苦しみにより苛まれて、衰弱してやせている故に死の直前にある、このような状態で牝虎は、生まれたばかりの子でも食べようと欲するのだ」と言うと、二人の兄は「お前が言ったことは正しい」と言った。

『金光明最勝王経』時諸王子各説本心所念之事，次復前行，見有一虎產生七子，纔經七日，諸子困遶，飢渴所逼，身形羸瘦，將死不久。第一王子作如是言：「哀哉！ 此虎產來七日，七子困遶，無暇求食，飢渴所逼，必還噉子。」 bkres pa dang skom pa dag gis rab tu

gzir ba / lus rid cing nyam chung ba ring po mi thogs par 'chi bar 'gyur ba zhig mthong ba dang / rgyal bu chen pos 'di skad du kye ma stag mo 'di ni bu btsas nas zhag bdun lon te / bu bdun gyis yongs su bskor bas zas btsal yang mi khom ste / bkres pa dang skom pa dag gis rab tu gzir bas gdon mi za bar bu rnams za bar 'gyur ro zhes smras so / 飢えと渇きによりとても苦しみ、やせて衰弱した体で間もなく死ぬであろう（牝虎を）見ると、一番上の王子は、「おお。この牝虎は、子を産んでから7日が経ち、7匹の子に取り囲まれて食べ物を探し求める暇がなく、飢えと渇きによりとても苦しみ必ず子たちを食べるであろう」と言った。

### (3) 蔵訳比較 3: 過去物語と現在物語の連結

『賢愚経』仏告阿難：「爾時大王，摩訶羅檀那者，豈異人乎？ 今我父王閼頭檀是。時王夫人，我母摩訶摩耶是。爾時摩訶富那寧者，今弥勒是。第二太子摩訶提婆者，今婆修蜜多羅是。爾時太子摩訶薩埵，豈異人乎？ 我身是也。爾時虎母，今此老母是<sup>4)</sup>。爾時二子，今二人是。」 de'i tshe de'i dus na rgyal po shing rta chen po de su yin snyam du sems / de ni da ltar nga'i yab rgyal po zas gtsang ma yin no / / de'i tshe de'i dus na rgyal po de'i btsun mo de ni da ltar nga'i yum sgyu ma lha mdzes yin no / / de'i dus na sras rab sgra chen po de ni byams pa yin no / / sras 'bring po lha chen po de ni ba su mi tra yin no / / de'i tshe de'i dus na rgyal bu tha chungs sems can chen po ni de gzhan du ma sems shig / / da ltar nga yin no / / de'i tshe de'i dus na stag phrug ni mi 'di gnyis yin te / そのとき当時の大車王は誰であるかと考えるならば、彼は現世における私の御父、浄飯王である。そのそのとき当時の、かの王のかの王妃は現世の私の御母、摩耶夫人である。そのとき長男の大音、彼は弥勒である。次男の大天、彼はバスマトラである。そのとき当時の末の子の摩訶薩埵、彼は、別のように考えてはならない<sup>5)</sup>、現世の私である。そのとき当時の虎の子はこの二人（泥棒兄弟）である。

『金光明最勝王経』復告阿難陀：「往時薩埵者；即我牟尼是，勿生於異念。王是父浄飯，后是母摩耶；太子謂慈氏，次曼殊室利。虎是大世主，五児五苾芻；一是大目連，一是舍利弗。」 / kun dga' la ni bka' stsal pa / / sngon byung sems can chen po ni / / shAkya thub pa nga yin pas / / gzhan yin snyam du bsam mi bya / / rgyal po zas gtsang yab yin te / / btsun mo nga yum sgyu 'phrul yin / / rgyal bu chen po byams pa yin / / rgyal bu 'bring po 'jam dpal yin / / stag mo skye dgu'i bdag mo yin / / bu lnga dge slong lnga po yin / / gcig ni maud gal chen po'i bu / / gcig ni shā ri'i bu yin no / 阿難陀に話された。「過去の摩訶薩埵は釈迦牟尼、私である。異なった考えをしないように。王は父，浄飯であり，王妃は私の母，摩耶である。第一の王子は弥勒であり，第二の王子は曼殊室利であり，牝虎はプラジャーパティーであり，（七匹の子のうち）五匹の子は五苾芻，一匹（の子）は大目連，一匹（の子）は舍利子である。」

蔵訳比較を行った結果を述べる。

「訳者が同一」を否定する情報は特に見られなかった。今後も比較検討作業を継続して「訳者が同一」か否か判断するに十分な情報を得ることを目指す。

漢訳と蔵訳の相違点が多少見られたが、「漢訳にあり蔵訳にはない」「蔵訳にあり漢訳にはない」のどちらかであり、「原文と大きく異なった意味で訳している」

## (68) 『賢愚経』と『金光明最勝王経』の蔵訳者について (石 田)

ものは特に見られなかった。翻訳時に参照した漢訳テキストが異なる可能性も排除できない。相違点は何故生じたのか、どのように生じているのか詳細に検討する必要がある。

訳出方法について具体的に述べるだけの情報は得られなかった。「助動詞の使い方」「並列助辞の使い方」「テンスの使い方」など文法を手がかりに、今後も分析を継続するとともに、文法を演繹的に利用するだけでなく、訳者推定のための文法を帰納する必要もあろう。

固有名詞は、蔵訳時にチベット文字に音写していることが多いと思われる。そのような用例を、ここでとりあげた文献以外にも同時代の蔵訳文献も対象にして幅広く収集し整理して、同時代・同一地域における固有名詞の蔵訳方法を体系づけたい。

漢訳から蔵訳に重訳されていると便宜的に仮定しているが、これは正しいか検討する必要もあろう。『金光明最勝王経』の別バージョンとして『金光明経』『合部金光明経』がある。梵文からの蔵訳の分析は、訳出方法や訳語などについて異なる側面からの情報が得られる可能性があるので、併用したい。

**3. 計量文献学の適用可能性** 計量文献学は、主に著者の書きグセなどの文体に着目して統計分析を行い、文献の著者推定、真贋の鑑定、著作時期の推定などを行う研究分野である。既に仏教学の分野での適用事例もある(高木 2001, 後藤 2004)。計量文献学のメリットは、人手による作業と比較して、「客観的な判断を行うことができる」「全体の傾向をつかむことができる」「直感的に予測しにくい結果を得ることができる」などがあげられる。一般によく利用されている文体に関する特徴情報としては下記のものがある(計量国語学会 2009)<sup>6)</sup>。

- ・品詞分布: 名詞, 形容詞, 動詞などの品詞の使用率
- ・機能語: 助詞, 接続詞, 助動詞, 前置詞など文法的な機能をもつ単語<sup>7)</sup>
- ・語彙統計: 文章に用いられた異なり語数や単語の出現頻度など

計量文献学の手法を本研究へ適用する場合のプラス要因・マイナス要因をあげる。

- ・プラス要因<sup>8)</sup>
  - ・機能語として格助辞や接続助辞などが利用可能
  - ・活用や連声の処理がほぼ不要で単語の認識が比較的容易
- ・マイナス要因
  - ・対象が翻訳文(原文の特徴を引き継ぐ可能性が大きい)
  - ・特徴の選択が恣意的(結果が異なる可能性がある)

翻訳の場合は、書き方のクセではなくて、訳し方のクセをとらえる必要がある。計量文献学の手法は、漢語からチベット語への訳し方のクセをうまく把握できる

かどうかは未知ではあるが、試す価値は十分にあると考える<sup>9)</sup>。

4. 結論 予備調査の結果得られた、今後の検証作業のアイデアを述べる。

(1) を手作業で行って得られた情報をもとに (2) (3) で計量文献学の手法を適用したい。(1) 蔵訳テキストの比較検討 ①さらに詳細な比較検討を行い (2) (3) の分析の手がかりとなる情報を得る。(2) 翻訳プロセスの分析 ②訳語: 2つのテキストの漢蔵インデックスを作成・比較する<sup>10)</sup>。③訳出方法: 翻訳ルールをそれぞれのテキストで作成・比較する。(3) 翻訳文の文体の分析 ④助辞や助動詞などの機能語の使用頻度を分析・比較する。④単語や品詞などの文章構成要素を機械的に集計して分析・比較する<sup>11)</sup>。(4) 対象テキストの拡大 ⑤捨身飼虎本生話以外の章。⑥法成蔵訳とされる他の 18 文献。⑦『金光明経』『合部金光明経』。

- 
- 1) このほかにも種々の方法が考えられるが、「テキスト分析」「書誌事項分析」に大別される。ここでは「テキスト分析」のアプローチをとる。 2) 蔵訳『賢愚経』は「go Chos grub 訳」、蔵訳『金光明最勝王経』は「Chos grub 訳」とある（上山 1990）。本稿では法成 = Chos grub = go Chos grub という立場をとり、いずれも「法成訳」と表記した。 3) 「加復初乳，我觀其志」の蔵訳がない。 4) 母虎に関する記述「爾時虎母，今此老母是」が蔵訳にはない。『金光明最勝王経』では「虎是大世主」で蔵訳は「stag mo skye dgu'i bdag mo yin」（母虎はプラジャーパティーである）。 5) 「gzhan du ma sems shig」に相当する漢訳がない。『金光明最勝王経』では「勿生於異念」が相当し蔵訳は「gzhan yin snyam du bsam mi bya」。 6) この他に「単語の長さ」「文の長さ」「識別語」などの特徴情報も利用されているが、本研究には適さないであろう。 7) 日本語における助詞の使用は文章内容への依存の度合いが低いいため書き手の特徴情報として有効であることが示されている（計量国語学会 2009）。チベット語についても当てはまる可能性がある。 8) 主にチベット語の特徴による。サンスクリットに比べると容易ではあるものの、具格や属格における単語切り出しの処理が必要である。 9) 法成のチベット語文体の調査研究に進展する可能性がある。 10) 訳語を機械的に抽出する手法の利用も考えられる。 11) N グラム利用の可能性がある。

#### 〈参考文献〉

上山大峻『敦煌佛教の研究』（法蔵館，1990）。計量国語学会『計量国語学事典』（朝倉書店，2009）。後藤義乗「計量文献学による漢訳者推定：無量寿経の漢訳者」（『印度學佛教學研究』52-2，2004）。高木健翁，村上征勝，伊藤瑞叡，岸根敏幸，佐野靖夫，伊藤康裕「サンスクリット法華経の計量分析の展望」（『印度學佛教學研究』49-2，2001）。壬生台舜『金光明経』（佛典講座 13，大蔵出版，1987）。

〈キーワード〉『賢愚経』，『金光明最勝王経』，捨身飼虎本生話，法成，計量文献学  
（九州大学大学院）